

座談会「大学と現代社会」

立花 隆 (21世紀社会デザイン研究科特任教授)

庄司 洋子 (21世紀社会デザイン研究科特任教授・元全学共通カリキュラム運営センター部長)

司会：上田 信 (全学共通カリキュラム運営センター総合教育科目担当部長・文学部教授)

○上田 まず最初に、私自身がぜひ聞きたいこと、立教大学における教養教育とはどういうものになるのか。私自身も非常に悩んでいるのですけれども、ぜひそのあたりのところを、ご意見なども含めていただければと思います。

今、立花先生と庄司先生は「大学と現代社会」という全カリ科目を担当されているのですけれども、そのあたりからうかがいたいと思います。例えば科目の目的とか、あるいは今まで話されていること、今後話されること、そのあたりのところからちょっとうかがえればと思います。

立教で教えてみて

○庄司 私は今年度、立花先生と初めてジョイントでこの科目を担当させていただきました。どちらかというところ、立花先生の補佐という感じで、学生にいろいろ諸注意を与えたり、そういうお目付役を担当してしまってますね。比較的履修者の多い授業ですので、ずっと通してその役割を務めているという感じなのです。ですから、シラバスの作成などをご相談しながらやってきたけれども、授業自体の進め方は、立花先生が担当なさってみて率直にどんな感じられたかを、ちょっとお聞きしてみたいなと思います。

○立花 最初、いろいろな人に脅かさ

れていたんですね。立教には質の悪い学生がたくさんいるから、授業がちゃんと成り立つかわからない、みたいなことを。そういう心配もあったので、庄司先生についていただいたんです。実際には、まったくそういう心配は必要ありませんでした。授業後に庄司先生から「後ろのほうの席で私語をしている学生がいて、ちょっと注意したわよ」ということは聞いたことがありますが。

僕が立教で接している学生というのはそんなに数は多くないのですが、すごく気持ちのいい学生が多いですね。それは、立教という大学の風土というか、そういうものがベースにあるように感じられます。本当に気持ちのいい学生が多い。

○上田 気持ちいいを具体的に言うと、どんなところが。

○立花 普通の意味で、本当に気持ちのいい学生なんですよね。素直で人間的にゆがんでいない。

○庄司 立教の大学そのものも学生も、非常に気に入ってくださっているので、安心しています。

私の印象ですと、やはりここ数年、立教の学生に私語が多いことをF-Campusの中でほかの大学の学生からも指摘を受けたとか、そういうことを聞いていましたので、私はそういう意味ですごく心配してしまっていて、どちら

かという、立花先生を脅す側になっていたと思います。

実際に、やはり学生の中には、軽い気持ちで来ている者もいますよね。そういう学生はだいたい後ろのほうにざわざわという。それを少し私は厳しく注意したり、見て回ったり。それを数回やっているあいだに、見事に、静粛で気持ちが悪いぐらい授業にみんな集中しています。

それから、立花先生の課題の出し方というのがあって、それをちゃんと聞いていないと宿題ができないというのもありますよね。ちょっと進め方を先生にお聞きしてみたいと思います。

教養教育はどうあるべきか

○立花 以前書いた『東大生はバカになったか』（文藝春秋社、2001年）のなかで現代の教養教育はどうあるべきかについていろいろ論じたんです。そこに書いた「こうあるべき現代の教養教育」の一つの見本となるような講義を自分でやってみたいという気持ちがありました。だから、この本に挙げた、いろんな要素を実験的にどンドンとり入れて授業をやっているのですね。

一定のスケジュールに沿って先生が学生に教壇から一方的に知識を流し込むという座学的なスタイルの講義はおかしいと元々思っていたので、学生にレポートを提出してもらい、できのいいものを書いた人にはみんなの前でプレゼンしてもらいました。

教養学部のある東大は、ある意味で唯一というぐらい、内容的には充実したカリキュラムを前から持っていたわけですが、新しい時代に対応できていないという反省から教養教育を見直すという動きが出てきました。そこで、学外から4、5人を委員として選んで徹底的に検証するプロジェクトを数年

がかりでやったんです。

教養学部運営諮問会議というものでしたが、その座長が東大総長を辞めたばかりの蓮實重彦さんだったんです。その時集まったメンバーは、私のほか、JICA会長の緒方貞子氏、森ビル社長の森稔氏などでした。そういう人が集まって議論したんです。その会議場はわりと大きな部屋で、教養学部の先生たちが周りを取り囲む中で議論していたんです。

東大でも教養教育には至るところに欠陥があるんですよ。しかも、改善案が提示されても、それを実行に移すというのはいろいろな事情で難しいわけです。一つの例を挙げれば、外国語教育はどうあるべきかという問題があります。これまでの日本の大学がやっていた、第一外国語にも問題はありますが、第二外国語はさらに大きな問題で、具体的に言うと、今、ドイツ語、フランス語を学ぶ効用はそんなに大きくないのです。学生の希望では、中国語がものすごく多い。ところが、ドイツ語、フランス語の先生に辞めてもらって中国語の先生をどンドン増やせるかといったら、現実的にできないですよ。大学の問題というのはすべて先生の雇用問題がかかっていますから。改善しようにも改善しようがない。そういう話が至るところに転がっています。

だから、その会合の中で僕が一つ提案したのは、そもそも今の教養の外国語教育というのはほとんど学生の役に立っていない。特にサイエンス系の学生に習わせる英語はまったくの時代遅れで、今のような教科書を使うのはやめるということです。

実は、今一番英語が必要なのはサイエンスの世界であって、共通言語はもう完全に英語になっていますから、英語で論文を書けないと話になりません。

○上田 いろいろなところに発信しな

いと、置いてけぼりになるという感じですね。

○立花 東大生でも、英語でサイエンスの論文を書ける学生がどれだけいるかといったら、ほとんどいないですよ。

○上田 そうですか。

○立花 もちろん大学院に行けば別ですよ。しかし、海外のオリジナル論文を英語でどんどん読むというようなことができる学生はほとんどいません。

生物科学と教養教育

○立花 そもそも、先ほどの、辞めてもらえないから内容を変えられないということが背景にあるのですが、それが東大教養学部で、科目別の教職員の人数構成というのは、この20年間ほとんど変わっていないんです。つまり、生物系、物理系、化学系と分けた時に、その人数のバランスは全然変わっていないんです。

ところが、サイテーション・インデックス（引用指標）という指標でみると、この20年間に発表された論文の領域別のバランスがどのように変化しているかがわかるんですが、サイエンスの世界には今、ものすごい大変換が起きているのです。ある時期から、サイエンス系の論文では生物科学系が圧倒的に多くなるんです。バイオですね。

では、生物科学系の教育を教養課程で学生にどれだけ与えているかといったら、ほとんど与えていない。東大の場合には、10年ほど前から高校で教える内容と大学で教えることのレベルの差が開きすぎて、接続が全然うまくいっていないという問題が指摘されるようになりました。受験制度の問題もあるのですが、特に問題になったことは、生物学をまったく学ばないで理Ⅲ（医学部）に入学している人が多数出てきたことでした。学生は何が有利か

で受験科目を選ぶので、高校で生物学を履修しない人もいたんです。それはとんでもないということで、医学部自身が医学部の進学ルールを変えて学生が選ぶようになった。そういうことを本来はもっと早く全学的にやるべきでした。アメリカのMITやハーバードも生物学は全員必修になっているんです。ハーバードなどは、先生も学ばなければいけないというルールができていて、生物とは直接関係のない学科の先生でも生物を学ばなければならないシステムになっています。基本的には分子生物学的な内容です。標準的な教科書として、『The Cell（細胞の分子生物学）』という有名な教科書があるのですが、英語で数年おきに刊行されます。日本語の翻訳版だと、電話帳ぐらいの厚さになるんですよ。僕は10年ほど前に東大教養学部で教鞭を執った時期がありまして、その時に生物系の専門課程に進学する学生たちの前で進路選択のための解説的な講義をしたことがあります。そこで彼らに『The Cell』を読んでいる人はいるかどうか、と手を挙げさせたら、ほとんど手が挙がらないんですよ。こんなに厚い本でしょう。だから、駒場の教養課程の学生は読まないですよ。僕は、取材過程でこの本に出会って、これは読んでおかなければ駄目だと思って、何年前から読んでいるわけですよ。だから、当然、東大の学生で、生物系に進学する学生であれば駒場時代に絶対に読んでいるだろうと思ったのに、ほとんど読んでいない。数人しかいかなかった。

○上田 全体で何人ぐらいですか。

○立花 300人～400人いたと思います。

○上田 300人の中の2、3人というか、ばらばらというぐらいですね。

○立花 そうです。ばらばらです。いくら何でもそれではまずいのではない

か、みたいなことをカリキュラム委員会でも述べました。駒場における教養教育の中身を抜本的に変えないと世界のサイエンスの進歩についていけない。駒場がついていけないということは日本全体がついていけないということで、そのあたりを何とかしないといけないという提案をしました。

それで去年から、教養学部理科Ⅰ類（専門課程で工学部や理学部の物理系に進学する学生が多い）でも生命科学を必修で学ばせることにしたんです。そのための教科書が作成されまして、厚みはあまりないんですが、それを編集した先生方は、その世界では一流の浅島誠さんなどの先生方ですから、中身はなかなかいいんです。

○上田 中身が凝縮されて。

○立花 はい。しかし優れた教科書をせっかく作っても、それをちゃんと教えられる先生の頭数がないんです。だから、生命科学を全員必修にしたけれども、どの先生の授業を取ったかによって、学生の理解度にもすごい差ができてしまっているのが現状であるという話を聞きました。

要するに教養の中身というのはその時代に合わせて急速に変わらざるを得ないし、変わらなければいけないわけですね。そのへんを先生の雇用の問題を含め、どれだけ変えていくか。外部から講師を呼ぶなどの対応が取られているものの、そういう形で変えるのはものすごく難しいですよ。というのは、先ほどの外国語教育の話になりますけれども、現状では相当部分、外部の講師に頼らざるを得ない。しかし大学はその講師に対する謝金をどれだけ払えるかということ、そんなに払えないわけです。そうすると、個々の教師の話を聞くとものすごく悲惨な状況があるんですよ。みんなやっぱり、「東大で一応教えています」「非常勤講師です」あ

るいは「常勤講師です」みたいな肩書きがあるかないかで、将来的ないろいろな面の評価が違って来るから、報酬が安くてもやっている。テレビ業界でいえば、芸能界など、とにかくテレビの仕事ができるなら何でもやりますという人たちが山のようにいるおかげで、実はあの世界は維持されているんですが、外部講師もこれと似た状況に置かれているわけです。

○上田 そうですね。先生の本を読ませていただいて、いくつか非常に面白い表があって、高校の教科書で、最新の情報はどれが多いかということ、生物が一番多いとかいうグラフがあって非常に興味深かったのですが。

本との出会い

○上田 先ほど分子生物学の、8センチぐらいの分厚い本という話でしたが、先生はその本に出会ったわけですね。今、本が非常にたくさんある中で、本との出会いは意外と難しいという感じがするのですが、『東大生はバカになったか』の中で、確か大きな書店を隅から隅まで全部見てまわるといいう経験が大切だということを書いておられます。そういう全体を見通すというようなことなどで、先生自身がどのようになされていたのか。あるいは、学校の教育の中でどのような試みがあるのかなというところに興味を持ったのですが。

○立花 僕はこの本に書いたとおり、そのようなことをやっているのですが、



立花 隆

池袋は昔からわりといい本屋がありますよね。ジュンク堂もありますね。それで、学生に本屋の話をしてみたんです。

○上田 立教の授業の中でですか。

○立花 全カリの授業の中で言ったら、ジュンク堂の存在をまったく知らない学生がいたのにはあきれ返りましたよね。

今、書店をめぐる環境が変わっているから、必ずしも本屋に行くのがベストとは言えません。アマゾンか何かのネット書店で検索して注文して届けもらう、というのが一般的になりつつあります。その構図がある意味では合理的になっているんですね。

○庄司 だから先生はこういう技があるということ、学生に相当教えてくださっていて、例えば新書。新書を一度に探せるサイトはご存じないでしょう。みんなこれを知っていたらいいぞというようなのを、学生にネットのこういうサイトが実はあるんだよと。「新書マップ」でしたか。



○立花 国立情報学研究所というのがありまして、そこではいろいろな意味の情報科学の研究をやっています。その一つに、例えば、日本で新しい検索エンジンをつくらうというプロジェ

クトがあるんです。その試みの中で、もともとは東大の先生だった高野明彦教授がつくった新しい方式の検索エンジンがあるんです。それはあるキーワードを入れると、普通の検索エンジンならそのキーワードが少しでも載っているとところを直接取ってくるという方式

ですよ。そうではなくて、連想検索エンジン、正式な名前はGETAというのですが、あるキーワードで検索するとそのキーワードに関連するキーワードがどんどん繋がって行って、一つのキーワードから連想されたキーワードが全部出てくる。だから、自分が調べたいことをちょっと入れると、普通の検索エンジンだとその言葉が入っているページしかヒットしないのだけれども、これだとたくさん出てくる。この連想検索エンジンはどんなデータベースにも使えますが、最初に新書のデータベースで作ったから、「新書マップ」といわれているサイトが有名です。それは要するに、キーワードから連想されるすべての新書が出てくるのです。これはものすごく面白いんです。

○庄司 本当に面白くて。だから、それをきちんと受け止めた学生は、その情報だけでもものすごく得をしていると思います。やはり分厚い難しい本を読むのではなくて、新書ならわりと手軽に買うことも簡単だし、読みやすいし。あらゆる新書がそこで探せるわけだから、あの情報はものすごく大事です。だから私は授業の時に、今日はすごく重要なことを教わったねと言うんです。今日はこのお話一つでも、すごくお利口になっちゃったとかね。

レポートを書かせる

○庄司 そういうことを交えながら、少し補足させていただくと、先生が学生に伝えたかったのは、教室の中で机に向かって、あるいは先生の話聞くというのが大学ではないと。それだけではない、今、ユビキタス大学という概念で、これはこの本にもありますけれども、要するに、社会全体が大学なんだということです。ですから、一つはそういう情報の集め方を知れば、大

学で先生にお話を聞かなくても自分でできることがいっぱいある。

それから、今は博物館めぐりを学生にさせているというか、するように課題を出しています。最初の課題は印刷博物館で、印刷という、活字メディアの重要性とか、でも今はどんどんバーチャルな世界へと変わっているとか、そういうことを学生に体験させるために、まず必修博物館が印刷博物館なんですよね。

○上田 必ずそこに行きなさいと。

○庄司 行ってレポートを書くと。

○立花 それはなぜかという、印刷博物館で「百学連環」という企画展(2006年9月22日～12月9日)が開催されていたからです。

○庄司 西周が「エンサイクロペディア」にあてた訳語が「百学連環」でしたね。

○上田 『東大生はバカになったか』の終章「現代の教養—エピステーメーとテクネー」のなかで触れられていますね。ダランベールなどあれに並んで、日本オリジナルのものという形で、西周ですか。

○庄司 だいたい学生にとっては、そんな博物館があるなんて、という感じですよ。印刷博物館。そこでの百学連環。

○立花 『東大生はバカになったか』の294ページですね。この百学連環そのものをテーマにした特別展を印刷博物館でやっていました。あの印刷博物館というのは、日本でも優れものの博物館です。先ほどユビキタス大学という言葉が出ましたけれども、社会的インフラのなかで、圧倒的に情報量が大きいのは一流の博物館ですよ。授業で何か教わるよりも、本当は一日かけて博物館へ行ってこいと言ったほうが学生が受け取るものはずっと大きいはずなんです。だから、とにかく印刷博物

館へ全員行けって、そしてそこで見聞してきた結果をレポートに書かせます。

立教大学には、いくつかの博物館に無料で入れるというサービスがありませんね。

○上田 あります。江戸東京博物館とかいくつかありますね。

○庄司 だから、そういうものもありますよということを授業で紹介して、そのうえで、しかし別にそこに限らず、自分の行ける範囲の、どこでもいいから自分で一つ博物館を選んで行ってきなさいと。そして、レポートはなぜそこを選んだのか、どういう博物館だったのか、自分がそこで何を得たのかということをレポートにして出させるということをしました。印刷博物館もプレゼンを、いいというか、参考になるね、このレポートはここがまずいねとか、これはここところが非常によかったねという例をいくつか選んでプレゼンさせたんですけどね。

○上田 学生たちに。

○庄司 そうです。印刷博物館もさせたのですけれども、2回目の、学生が好きに選ぶ博物館のプレゼンはもっと多様で、私たちもそんな博物館があるんだ、というのがいろいろ出てきて、それも学生にプレゼンを準備させてやりました。私がやはりすごいと思ったのは、立花先生は学生になぜこの授業を取って何を期待しているかというのを1回目の課題で出させて、それから印刷博物館、次に自分の選んだ博物館と3回レポートを出させているのですけれども、全員のレポートをお読みになって、そしてここが非常によかったとか、これがちょっと駄目だったとか、こんな感じで書いちゃ駄目だとか、提出前に一度必ず読み直しなさいとか、そういうものを事細かく、文章のお作法を指導されるのです。書く人から見た提出物のあり方をすごく懇切丁寧に

一人一人の成果物を見て、その中で問題がある人を何例か紹介する。ちゃんと丁寧に、ここに出されちゃ嫌な人は、レポートを出す時に、「みんなの前に出さないでほしい」とちゃんと書きなさいとか、そういうことまで丁寧に。

○立花 「出さないで」という学生は)意外に少ないですね。

○庄司 そこまでやって、一人一人の執筆指導までされて。だから、この授業で真面目についてきている学生は、とてもお得ですよ。教育とはこうでなければいけない、みたいなところがあって、私も非常に参考になったのですが、学生はたぶん最初は相当びっくりしたと思います。軽い気持ちで出したら、こんな出し方は駄目だとか。

○立花 要するに、携帯メールみたいな感じで書式に気を配らないで出した学生が、最初はいるんですよ。

○庄司 最初はそういう人が結構いるんですけど。

○上田 だいたい字数などは一応決めておられるんですか。

○庄司 おおよそA4でこのぐらいと指定しているのだけど、でも、今まで非常に軽い気持ちだったのが、この科目はこれでは済まないらしいということが分かってきたら、もう結構目の色を変えていて。

○立花 ものすごく学生が変わりました。

○庄司 1回ごとに階段をのぼっていくぐらいに力がついていてね。すごいです。

○立花 今レポートを3回出させて、あともう1回、最後に出させる予定になっていまして、今のレポートのうちの2つは、何人かを選抜してパワーポイントでプレゼン資料をつくらせて、発表させました。一番最初にそれをやった時は、半分はちゃんとできているけど、半分は駄目なんだよね。

○庄司 全然ね。ふらりと来た、みたいな。

○立花 それで僕から発表者に質問をしたり、フロアからも手を挙げさせて発表の評価をもらうことをやったら、次の回は一挙にその水準が変わりました。

○庄司 緊張感がね。

○上田 やはり学生は常に受け身というのでしょうか。そういう習慣がついている中で、全体にプレゼンテーションするということが、ある意味で非常に大きな教育効果があるということですね。

○立花 そうですね。

○庄司 相当びっくりしている学生もいると思います。つまり、「出だしのところはこんなによかったのに、おしまいの方になったら全然駄目だな」、みたいなことを具体的に言われて。例えば就職の時に自分でステートメントを出すとかいう時でも、読む人にとってはたくさんの中から、文章の頭の出だしのところで印象づけられて、あとのほうまで読む気がするかどうか決まるんだぞ、とか、そういうことを事細かに授業でお話しされているので、学生は何だろうと思っていると思うんですね。

だからこの科目でいうと、大学論をされるんだろうと思って来ている学生は、相当びっくりしていると思うんですよ。大学のお話をずっと聞くのかと思ったら、まさに大学での教育はこうでなければいけないというのを、先生は実践されているわけだから、それがだんだん、あと数回で本当に大学とは何かというところに学生の頭が、自分で取れんしていかないといけないわけですよ。そういう場になるかどうかという。

学生を挑発する

○立花 僕がそもそもこの大学に誘われた時、立教大学の話をいろいろかがう中で、東大元総長の蓮實さんにも話をうかがう機会があったんです。蓮實さんには立教で先生をやっていた時期がありますよね。

○上田 そうです。一般教育部で映画論などやっていました。

○立花 蓮實さんが映画の講義をして、そこで映画に引き込まれた連中が、蓮實スクールの出として今の現役で一番質がいい、厚みを持った映画監督の層をなしています。直接、間接の影響があり、「おれは実はあの蓮實さんの授業は、反発があったから出なかった」という学生もいたようです。でも意識して反発していた人がその反発から監督になったりしていて、そこが非常に面白いのですが。

僕は蓮實さんに直接いろいろな話を聞いたんです。蓮實さんはどういう授業をやったのか非常に興味があったから、もう一回そのころの授業の再現授業というか、もう一回やってくれませんかとお願ひしてみました。そうしたら、「あれはもう二度とできません」と。やはり自分がすごく若くて、学生をものすごく挑発したそうです。

○上田 らしいですね。

○立花 それで、「もともと、おれは君らみたいなバカばかりいる大学に来て教えるつもりはなかったんだけど」というようなことをあからさまに言ったりした。蓮實さんは映画の見方も独特です。

○上田 映画のストーリーではなくて、何が映っていたかというところを事細かくレポートに書かなければまったく認めないという授業をやっていたという話を聞いています。

○立花 それと、いわゆるA級映画で



はなくて、B級、C級の映画を盛んに論じるわけですよ。そういうのに触発されて、事実問題として、日本の映画界が変わったんですよ。

この大学はそういう体験をしたことがあって、蓮實さんがやったのだったら、おれも学生に働きかければ何かできるだろうと思って。だから、一所懸命いろいろな形で働きかけました。要するに、教壇から何かをしゃべるだけという授業ではなくて、相互にアクティブにかかわり合うような授業が、これからの授業であるべきだと思いますので。まずはとにかくこのコースを取った人たちにとって、やはり基本的に何が一番必要かといえば、やっぱり読むことと文章を書くことです。読むと書くことが、教養の一番基本なんです。教養コースで伝えられるものなんて極めてわずかですよ。1年間やったとしても新書本1冊の分量になる程度でしょ。せいぜいそんなものでしょう。

○上田 せいぜいそうでしょうね。そこまでなかなかいかないものですよ。

○立花 そうですよ。だから、やはり少なくとも何らかの能力を身につけなければならないのだとすれば、要するに、学ぶ力が大切なんです。大学を離れて、ある教師の手を離れた人間が、その後どんな新しい課題にぶつかっても、自分で学んでそれを切り抜けていく。そのベーシックな基礎能力が一番大事なんです。

○上田 この本で「自己学習能力」と

いう形で、非常に力説されていますね。

○立花 そうですね。

○庄司 立花先生は、特別にご自身に関心を持っておられる脳の話や、授業の中ですごく丁寧になさる。脳というのはどういう仕組みになっていて、どういう働きを持っているのかとか。それから、目はいかにだまされやすいかとか、そういうことを実験的にやってくださって。

○上田 授業の中で実際にだまし絵というとか、錯覚という形のものを。

○庄司 そうです。錯視の一連の体験とか、そういうことをやって、やはり学ぶ、認識するとはどういうことか、とかね。

○上田 脳の話、例えばいろいろな伝達物質とか、話が多少分かっていれば、ある程度分かると思うのですけれども、初めて脳という話をぶつけた時に学生の反応はどんな感じでしたか。

○立花 どこから入ったか忘れたんですが、脳の本を何種類か紹介したんです。僕はわりと本をたくさん紹介するんですよ。

○庄司 先生はすごいですよ。だから、授業の時はいつも旅行用スーツケースに本をいっぱい詰めてそれを引いて来られるのです。この立教通りを立花先生がああトランクを引いて歩いているというのは、このあたりでは噂になっているぐらいなんです。それで教室にそれを運んで、OHCで次から次から本を



出して、その中にある図とかここの部分にこう書いてあるということや、先生が傍線を引いてあるのとかそのままを出して。だから、授業の前は黒板のところに10冊20冊と並べて、はい次、はい次という形で見せていく。

○立花 学生のレポートなどもそのまま見せてしまうんですよ。「ここはちょっと問題だ」とか。

○上田 実際にみんなが見ている前で朱を入れるような形をとっているという。

○立花 そういうことをどんどんやったら、レポートの脇にとこどこ数字が入っていて、学生はそれを点数だと思っちゃったの。

○庄司 心配してね。それは単なる書類の番号なんだけど。

○立花 それは、その学生が何番だという。

○庄司 そのぐらいはっきり映し出されて。でも、やはり今の学生は、ああいうふうに大量の本を読みこなすという世界に生きていませんから、やはりその重みに圧倒されて、そういう世界があるんだということを改めて知ってもらうんですね。本の実物をあれだけ運んで来て教室でその場でどんどん見せていくという。

○上田 普通、教員がやる場合には、文献リストみたいな1枚ぐらいの紙でやってしまうのが、実物を持つてくるというのが一つの理念みたいな。

○庄司 すごいですよね。

○上田 やはりそれは受ける側の印象が全然違う。

○立花 違いますね。

○上田 イメージすると、それはそうだろうと思いますけども。

○庄司 その時は、ついていけているか、いけていないかが分からないですけど、やはり本を現物で見せて、本の中のページで確かめる。それはやはり、

学生にはなかなか驚きの教育だと私は思いますけどね。

○上田 逆に今の世代だとページをめくるといふ、われわれの時には新しい本のページをめくるそのものが、とてもワクワクするところがあったのですが、そういう体験そのものが今の学生には意外と欠けているようなところで、そうやって示していくということの意味みたいなものがあるのでしょうかね。

○立花 いろいろな意味で今の学生はわれわれの時代とはものすごく違いますよね。

新聞を読まない大学生

○上田 もし先生ころの学生と比較した場合、今の学生との世代の違いはどのようなところにありますか。

○立花 例えば今の学生はほとんど新聞を読まないでしょう。

○庄司 そうですね。

○上田 そうですね。

○立花 僕は年に1回、東大の工学部でメディアに関する講義をやっている、その時に必ず聞くことがあるんです。「新聞を毎日読んでいる人はいますか」って。学生の数は全体で200人〜300人ぐらいです。そうすると、7、8年前は、ある程度手が挙がったんです。今は数百人のうち、3人か4人か、そんなものですね。先日、ある先生と話していたら、「最近の学生は新聞どころか、テレビも観ないですね」と仰っていました。僕はあっけにとられてね。それで、「関心領域が自分を中心に、周辺3メートル以上に広がらない、だんだんそういう社会になりつつある」というんです。それはやっぱり相当まずい。人間として健全な育ち方をしていない。つまりあるべき現代の教養、いろいろなベーシックな能力として、『東

大生はバカになったか』のなかで挙げたようなものは、おそらくほとんど身につかない。またそういう必要性もあまり感じていない。実際に社会に入っていくてもずっとそういう必要性を感じないまま自分の関心領域の近くだけで生活を送る。そういう人たちが増えつつある。これからどうなるんだろうと思います。

先ほど述べたようなレポートを書かせて、みんなの前でそれを評価するというのをやると、学生の書くものの質があつという間に変わりますね。一番最初のレポート課題は、あなたは何になりたいのか書けというものでした。どういう人間になりたいか。職業的にどういう領域に入りたいとか、まずそういうことを書かせる。それで第2に、そのために必要な能力は何かを書かせたのです。3番目は、自分のただいま現在の能力と比較して、おまえの欠けている能力は何か。この課題では、自分になりたいものと、今現在自分への欠けているところを埋める場が大学であることを認識してもらいたかったです。単に教養教育だけではないけれども、ある程度のは大学がそれなりのメニューを用意してくれて、制度的に学生を教育してくれます。しかし大学が提供できないものもたくさんありますよね。それを埋めるものは特定の大学ではなくて、ユビキタス大学というか、社会の一角の中にどこにもある。そういうものをちゃんと自分で吸収して、自分を育てるといふか、レベルアップすることができる能力を与えるのが、広い意味での教養教育です。それさえ身につけばあとは大学を出てもOKなんです。基本的にはそういうことなのではないかと思っています。

今、大学の教養教育の現場は困難な状況に置かれています。旧帝大クラスの大学の教養教育がガタガタになって

しまっているなかで、東大は教養学部という学部を維持しているおかげで、なんとか機能を保っているんですね。私学では、やはり相当部分がガタガタになって、結局、教養教育で頑張っているのは国際基督教大学（ICU）と立教大学ではないですか。その立教の力というのは全カリの力ですよね。そういう意味で10年前に寺崎昌男さんが果たした役割というのは、ものすごく大きかった。こういう関係の研究をしている人の中で最大の論客だし、実践者だし、その人が中心になって全カリのシステムというものをつくって、かつ、それに立教の伝統がプラスされた。

立教の歴史の本を読んでいると、立教の全カりに至る道が創立のころまで遡って書いてあります。ほかの私学がまだ大学と称しない時期、日本全国で大学というのは、東大と立教くらいしかなかった時期があるわけですよ。東大と立教では性質は違いますが、立教の場合、アメリカの大学をモデルとして、カレッジ教育というものを非常に重視した。実はハーバード大学や、数多くあるユニバーシティも、一番の核の部分はカレッジであるという。そういう発想から、カレッジ教育における人間教育のために教養教育を重視するという姿勢が、立教の場合は建学の当初からあった。途中挫折したことはあるのですが、時を経てそれがちゃんと蘇ってきて、今、全カリという制度ができた。その過程に寺崎さんという人がいた。

○上田 寺崎さんの書かれた『大学改革 その先を読む』（東信堂、2007年）という本が、ちょうどいいタイミングで最近出て、私自身も読んで、なるほど。ある意味で、今、大学で学士課程教育であるとか、初年次教育とか、いろいろなことが文科省のほうからいわれて、FDの義務化なども含めて。寺



庄司 洋子

崎さんは立教の全カリの中のすべて、DNA といえるのでしょうか、要素みたいなものを全部仕込んでくれたという感じのことを読んでいて非常に感じますね。

○立花 庄司先生は、寺崎さんが全カリをつくる過程そのものと関係していらっしゃると思いますよね。

○庄司 そうです。私は寺崎先生が全カリ部長だった時にずっと全カリ委員で、もうたつぷりとお付き合いさせていただきましたからね。私の全カリとの付き合いというのは、当然ながら結構しんどい部分もありますよ。だけど、私は自分が学生時代の大昔受けてきた教養教育のことを考えると、今の学生はどんなに贅沢をしているかと思うぐらい、特に立教の場合は、東大でかなり頑張って英語の教育改革をしても果たし得なかったようなところまで、立教はやり抜きましたね。それと、総合科目のこの履修要項、つまりシラバスを見ると、もうこの贅沢さというか、これを一日中読んでいても結構飽きないぐらい面白いんですよ。そうすると、私たちはやはり社会科学3科目とか、人文科学3科目、自然科学3科目といって、〇〇学、〇〇学という名前の科目で、先生の趣味か好みかよく分からないけど、先生のやりたいことをちょっとやっているという感じの授業で、とにかく通過すればいいからと思って単位を取っていったんです。それとは明らかに違います。やっぱりこれだけの大勢の学生の中には、何であれ、やらなければならないからいやいや通過し

ているという学生もいるでしょうけれども、でも、マジョリティは今そうではないなという感じが立花先生の授業を見ていてありました。だからさっき先生が話しかけて途中で別の話になってしまいましたが、1回目に課題を出して書かせて、そうすると、本気で書いた学生とおぎなりの学生とは、もう格段の差がついて、こういうおぎなりも本気でいわれて直すようになって、2回目のレポート、3回目のレポートで、もうついてこれなくなってしまう学生はリタイアしてしまっているかもしれないけれども、やはり残っている学生はみんなそれなりに伸びますね。ここまで穴の開くほど隅々まで読まれてしまっていると、やっぱり緊張して書いているし。

○立花 やっぱり先生がちゃんと読んでいるということが分かったからなんですよ。

○庄司 そう、びっくりして、本当にきちんと学生は書くようになりました。

○立花 でも、読んでいると結構面白いんですよ。今の若い人の考えが分かって。

○庄司 面白いですし、やっぱり教育の中にある対話性というか、そういうものがすごく感じられて、これはすごい実践だと思いましたね。

○立花 でも、これ以上人数が増えたら、レポートを4回も書かせて全部読んだら大変ですよ。

立教の教養教育

○上田 教養教育について話をしていますが、社会においても、例えばヒラリー・クリントン氏が、いわゆる教養大学を出たとか、ICUが全面的にリベラル・アーツを軸に改革をしたというように、教養教育に光があたっています。その中であって立教の教養教育の特色

は何でしょうか。ICUなどは少人数教育という形で教養教育を展開しているわけですけども、立教の場合は、これだけ急速にマンモス大化したということと、なかなか少人数教育ができにくいということで、ICUと同じ道はなかなかたどれないだろうということもあると思います。

あと、東大の場合には、1、2年が駒場で教養教育、3、4年が本郷などで専門教育というように、キャンパスも分かれているし。

○庄司 担当者も分かれています。

○上田 分かれていますね。立教の場合は、ある意味で並行しながらやっていくということに全カリの特色があるかと思います。例えば、立教を担当した、あるいは東大などで教えられて、このあたりが全カリとしての可能性があるよ、あるいはこのへんが問題点かなと感じられるところはありますか。

○立花 僕は、なぜ立教の全カリがこんなにうまくいったのか、まだよく分からない面があります。大学によって全然違うのですが、ほかの大学の教養学部が、なぜあんなに簡単に駄目になっていったのかといえ、要するに大綱化の流れのなかで教養を除くほかの全学部、全学科が教養教育に割り当てられていた時間を大きくむしり取ってしまったのです。ところが、この大学は周辺の学科、研究科が、みんな全カリのために、それぞれの持ち分を提供してつくりあげている。

○上田 そうですね。教員も出すし、ノウハウみたいなもの。

○立花 そこが大違いでしょうね。駄目になったところと、こういうものをつくったところとの。あれはなぜ可能になったんですか。学校の伝統ですか？

○庄司 これはすごいことだと思います。私も、ちょうどその議論が始まったところにこの大学へ着任しましたか

ら、何だこの大学はと思うぐらいびっくりしたんですよね。そのころの一般教育部とっていましたが、学部に近いような一般教育部の先生方と、各学部の専門課程を教えておられる先生方が一緒になって、教養教育をどうしようかこうしようかで毎晩のように議論していました。

そういう時に、非常に上手に改組したということですよ。一般教育部を実際には解体していったわけですが、その代わり今まで一般教育を担当してくださっていた先生方ばかりではなく、全学部の先生方が総合科目を担当することにした。それから、言語については、むしろとびきり語学教育の専門家をたくさんつぎ込んで、これはこれで特別なものになった。ただ、それぞれが好きに教えるのはもうなしということですね。それこそ大変なことですよ。シラバスやテキストやテストや、そういうものを全部統一するのですから。

総合科目も、同じ科目名であってもいろいろな方が担当する。ただ、その場合のコンテンツの基本は、ちゃんと科目定義として書いてあって、ここを逸脱しないような内容にするということ、一応ルール化しました。だから、そういうこと一つ一つがものすごく緻密に積み上げられているのです。そう簡単には崩れることが難しいように作りあげています。組織としては、全カリというのは、吹けば飛ぶほどのものです。全カリに所属する教員がないわけですから。

○上田 今度、今までいわゆる一般教育部にいた方が、それぞれの学部張りつきみたいな形であったのですが、来年から全部なくなりまして、それぞれ新しい学部が異文化コミュニケーション学部という形で、今まで言語などを担当されていた方が集まりました。

○庄司 言語の先生方がそこに集まって、専門教育もできるし全カリのほうにも責任を持つと。

○上田 同時に、全カリの言語も担っていただくという形になっています。

○庄司 だから、何段階かをへたどり着いたゴールなんです。結局、そこに行くまでの組織をどのように動かすかというか、つくりかえていくか。やはりまさに寺崎先生などの力は、そういう意味ですごく大きかったと思います。一般教育部を解体するというのも、すごくシリアスなことでしたよね。

○上田 私もその現場にいましたので、いろいろ大変でしたね。

○庄司 これをやり抜くというのは大変なことなんです。しかも、今まで教養教育を担当したことのない専門の先生が、その科目を担当するというのが。私は、自分が全カリにかかわっていて、一番譲りたくないと思っていたのは、全カリで教えるというのは、専門で教えるよりはるかに難しいという点です。つまり、全学部、全学年、そういう学生や受講生に対して意味あることをきちんと教えていくということは教育の能力がものすごく問われるわけです。だから、専門で勝負する人たちが全カリを練習の場にするというのは絶対に困るとか、そういうことにすごく強くこだわってきたのですけれども。

少人数の条件があるところはいいですけど、ある程度の大規模な授業もやらなければならないという与件があれば、教育力はさらに問われるから、そういう意味では、やはり本当に教育の試練という感じがちょっとしましたけれどもね。自分の全カリ科目を担当してみても。

○上田 教員からすると、全カリのあり方、総合科目のあり方は非常に挑戦心をかき立てるところがあると思いま

す。学生から見てどうなのかなというのは、実際に私は今、総合科目を担当しているのですけれども、先生の『東大生はバカになったか』322 ページ、第1パラグラフの4行目「メニューを並べて、あとのことはおれは知らない、食べたければ勝手に食べると突き放すのではなく、本当にそれを食べるのか」というようなことを書かれています。今、反省しますと、なかなかそこまでいかないという感じなのですが。ある意味で、最初のほうで出てきた自己学習能力ということで、学生自身が自分の力で、自分はどういう科目を大学の中で取らなければいけないかというのを選択していくというようなことをどのようにサポートしていくかということにもなろうかと思うのですが、先生のほうのビジョンというものがあるのでしょうか。

生徒から学生へ

○立花 僕が最初に書かせたレポートの中に、1年生がこういうことを書いていました。彼は高校から大学に進学してすぐのところ大学がどういうところなのか全然分からなかった。高校と大学は全然違って、学生というのはとても自由なんだということがわかった。つまり、高校だとすべてのメニューが決まっているのに、大学はそうではなくて、自分である程度自由に講義科目を選択できる。しかしそうすると今度は何をどう選択するのが自分にとってベストなのかが大きな問題になってきた。大学に入っていきなりシラバスをポンと渡されて、適当に取れというのは酷ではないか。そこはちゃんとしたガイダンスというか、チューター的な人が指導するとかの配慮があるべきではないか、と。寺崎さんの本にも、そこがちゃんとうまくいかないと駄目

だということが書いてありましたが、実際にはどうなのでしょう。

○庄司 実際にそうですね。全カリを見ていて、私たちもずっと全カリの委員会の中で議論したのは、やはり履修指導、履修支援を徹底してやるというので、かなり組織的になりましたね。それぞれの学部がちゃんとカウンターを開いて、相談があったらおいでという感じで、それぞれの学部の定めた履修規定に合うように取っていくというのを、学生は右往左往しながらもなんとかやっていくわけです。これを丁寧にやるというのはものすごく大事なことですよね。部厚い冊子を渡されたらもう、わけが分からなくなって、中には本当に半ベそをかいているような学生もいる。

○上田 履修要項を読み解くだけでも、非常に複雑なので、かなり大変ですよね。

○立花 それはありますね。

○庄司 面食らっちゃうんですよ。大変だと思ったら、頭が真っ白になりました、みたいな。そこは高校との違いですね。

○上田 われわれは学生のことを「学生」というし、私たちも学生というアイデンティティを持っていたわけです。今の立教の学生は自分たちを「生徒」と言ってしまうのですよね。大学の2年ぐらいになっても、自分で発言して「私たち生徒は」と言ってしまうと、「学生」と「生徒」の切り替えというのが、文学部のケースですが、



上田 信 (司会)

できていない。教員の側も反省しなければいけない。自分で学ぶ人間というのが学生の意味だと思うのですが、そのあたりの意識の切り替えというのを、今まで以上に行わないと、高校までの習慣がなかなか抜けないということがあるかと思えます。

先生のこの本の最後のほうだっと思うのですが、「もし私が教養学部長であったら」というようなことが書かれています。全カリ部長というのは、全カリの総合まとめみたいな、語学と総合科目を両方またがって運営しているのですけれども、もし立花先生が全カリ部長になったら、どういうことを実践されたいですか。

○立花 僕は能力不足でお手あげですね。

○上田 いえいえ。例えばどんな。

○立花 今言ったことがものすごく大事な気がしますね。自分がこの大学に初めて入った学生の気持ちになって、最初に何のどのページを見て、どのように頭の中が動いて、ということを考えて、相当、最初の一步、最初の数歩のところを導くというか、それがものすごく大事です。立教大学はどうなっているか知らないけれども、おそらく集合ガイダンスみたいなものがあるはずですよ。

○上田 なかなかそれが、全カリの集合ガイダンス、各学部に分かれてのガイダンスは。

○立花 あると言えばあるでしょう。

○庄司 でも、全カリ部分をどのようにガイダンスするかという、ガイダンス担当者を集めてガイダンスをやっていますから。そういう意味では、相当、改善されて丁寧になってきたと私は思います。

○立花 4年間のキャンパスライフの中の、全カリというのは、その全体構造の中のこういう部分で、ここでどの

ような選び方をすることが大事だ、というような説明を学生たちに与える場はありますか。

○庄司 もちろんそういうものもありますし、非常に具体的な履修の仕方に至るまでを、やはり全カリというのは分かりにくいわけですよ。言語科目はこうなっていて、総合科目はこうなっているとか。それを全カリ委員がガイダンスをするということで、そのガイダンスが学部によってばらつきがあっては困るからということで、ガイダンス担当者のガイダンスをやることになりましたからね。そういうシステム化もすごく必要です。

あとやはり履修指導、履修相談をする日というのを設けていて、学部ごとにどこに行けば自分が悩んでいることを聞けるのかというのを、オープンカウンターにしている。結構そういうことに気づきだしたのも、そんなにすぐではないですね。全カリが立ち上がって、まずとにかくしっかり運営していくことが大事ということで、学生一人一人の、学生の側から見てどうなのだろうということまではなかなか思い至らなくて。

私などが部長をやっていた時は、これは先生方の苦情がだいぶあったのだけれど、運営委員が自分の学部の学生として入学してきたという気持ちになって、あなただったらどういう履修計画を立てるかやってくださいということで、運営委員の先生に履修計画を立ててもらいました。そこまでやりましたよ。

○上田 履修要項を渡して。

○庄司 渡した後、先生方ご自身にまず1年で入ってきて、どのように取りましますかというのを時間割に記入してもらったんです。これが結構大変でした。

○上田 学部と全カリの履修要項を両

方見比べながら、時間割の中にパズルのようにうまく当てはめていかないとできあがってこないですね。

○庄司 それで、そんなことまでやられるのかと叱られてしまいましたけれども、やってみて、やはり学生がいかにまごつくかというのが分かって、それからこういうチャートをつくってみたほうがいいのか、こういうものをどんどん開発していったわけです。相当そういうことを積み上げてきていますのでね。立花先生には、できれば今度、4月のオリエンテーションの期間に履修相談の風景を見ていただけると、結構面白いです。様子がよく分かるので。

○立花 1年のカレンダーを通して体験しないと。僕はまだ1年過ぎていないから。どういう水準で最後の評価をするのか。大学によって、あるいは学科、研究科によって基準が違うでしょう。これはどのようにやったらいいのか、いろいろな人が来ているいろいろなことを言うもので、結構、自由みたいですね。

○上田 わりと担当している教員に任されているところはあるんです。学生にアナウンスしたことは、一応契約ではないですけど、守るという形が保たれていればという。しかしながら、だんだん厳正化みたいなことで厳しくなっています。例えば、Aはどのくらいとか、Sはどのくらいとかいうことはいわれはじめてはいます。

○立花 東大なんかだと、各評価段階ごと何%という割り当てが決まっているんです。

○庄司 正規分布させないといけないのね。

○立花 そうなんです。

○上田 科目の性格によって、必ずしもそういうものが向いているのと向いていない内容がありますからね。

一歩ずつ前進する

○上田 庄司先生は3代目の全カリ部長ですが、全カリのポストから離れて、あの時やっておけばよかったとか、あるいは今だったらこうするだろうなどいうことはありますか。

○庄司 いろいろな学部にも、本来自分の専門とは別に言語の先生などがはりつけられるという、分属といわれていた問題がすごく引かかかっていて、結局、あの先生方は自分たちの言語教育グループの先生方として、学部長などの代表を送り出し得ない位置におられることが一番気になっていたんです。今回ようやく先生方自身も、専門教育に携わるとか、大学院教育に携わるとか、そういう道が通ってきましたね。言語の先生、スポーツの先生は、来年度からそういう方向に行くわけです。私は、本当はそういうことにも発言を強くしたかったけど、あの当時、部長をやっているころは、もうそれどころではなかったと。まずは当面のことをと。

それから、私が担当していたころは、やはり今よりもはるかに大規模授業が多くて。ウェブで登録するシステムが始まったけれども、学生がそうなったことを知らずに混乱するとか、そういう状態だったのですね。そういうこと一つ一つが、やはりおかしいことはおかしいというように分かってきてね。だいぶ改善してきて、皆さんのいろいろなご尽力でだいぶ状況がよくなったなという感じはします。

でも、総合教育というのは、結局、各学部の先生がそれぞれ出てきて運営しているわけだから、あまり組織的にその内容を検討したり、きちんとやっていくことが困難な状況でしてね。上田先生が総合部会長となった時に、全学の教員に対してメールが流れるよう

になったんです。私はあの時、これだと思いましたね。本来これが、私がやっていたところからなくてはならなかったんですよ。総合教育というのはみんなの責任なんだけど、みんなの責任であるのが、誰の責任でもないようになって、本当に担当で任された人が苦し紛れにいろいろなことをやらなければいけない。その努力が伝わらない組織だと思うんです。ずっとそういう気持ちでいたから、あのメールが来た時はうれしかったですね。やはり総合科目は特にこれでしっかりと、全学にその都度情報を共有するようにしていかないと駄目だなと。

引っかかっていたことが、やはり一歩ずつ前進してきているというのは、すごくうれしく思いましたね。

○上田 最後ですが『東大生はバカになったか』という非常に挑発的なタイトルですが、もし仮に、例えば立教でのこの授業での体験、今すぐということではなくて、何か本に書くということはお考えでしょうか。

○庄司 書いておられるかな。

○上田 書いておられますか。記事ですか。

○庄司 いえいえ、まだ計画中ですよね。

○立花 ええ。

○上田 では、あまり聞いてはいけなかな。もし書かれるとすれば、どんなタイトルになりますか。

○立花 タイトルはあとから考えるんですよ。

○上田 分かりました。

○庄司 でも、授業の記録は非常に丁寧にとっておられますよ。

○立花 全部残していますから。

○庄司 ビデオで撮っておられるし、先生のウェブページに、授業の進行状況を出しておられるから、それは期待できますね。

○立花 学生の中で、手伝おうという6、7人の学生が、授業のレジュメをインターネットに出したりとか、そういうことをしています。

○上田 なるほど。それぞれ巻き込みながら。われわれとしては、ぜひその本を、将来の読者として楽しみにしていますので、ぜひよろしく願います。

これから授業ということで、本日の対談は終了にしたいと思います。本当に長いこと、どうもありがとうございました。私自身、非常に勉強になりましたというか、励まされたかもしれません。

お忙しいところどうもありがとうございました。

○立花・庄司 どうもありがとうございました。

[2007年12月13日(木)]

池袋キャンパス12号館2階応接室にて]